

<今回>199回目 2016年11月21(月)16時~19時 1503号室

読書は8冊目「邪馬壹国の論理」55P 三国志跋文の誤読について より

<前回>198回目(16-11-7) 出席者10名

資料 16-11-07-1) 前回のまとめ(清水)

-2) 榎一雄氏の反論の要旨(清水)

-3) 木村賢司氏のDVD2005年東京南大塚での講演要旨(清水)

A 報告

木村賢司氏は関西古田史学の会、多利思北孤の教科書作成の方、電源工事のため暖房効かなく寒かった。

津多家で会食9名、15345円(1700円・6名+2000・2+1500・1) +355円

B 資料 -2) 毎回のまとめから榎氏の反論をまとめた。古田説の論証を肯定的にとらえている事項と彼の結論をまとめたもの。-3) は東京講演のVTRテープをDVDに木村賢司氏に変換して送ってくれたもの。DVDを貸し出す。

C 読書「邪馬壹国の論理」P37邪馬台国論争は終わった 十一から

十一)①2~3世紀の日本列島が考古学上武器型祭祀と銅鐸祭祀とに分かれていた。

②倭国の女王卑弥呼は第1代の主ではない。少なくとも2世紀以来の王統を引き継いで3世紀(前半)に至っている。3つの定理(二島、一大率、鑄型)には『邪馬台国』はなかったに使われた論証は一切使ってない(邪馬壹国、水行10日陸行1月が総日程、対馬(南島)と壱岐の半周が1万2千里の中、倭人伝の数値は誇大値か)③考古学上の出土状況は一切考慮にいれてない。2つの異なった方法により得た帰結は同一の事実を示した。これが不動の史実である。

結び)博多湾岸は奴国として邪馬台国を探していたのが不毛の論議となっていた。補4 広矛、中広矛の類をもって1世紀前後にのみの出土遺物とみなすことは2~3世紀遺跡皆無説になるので道理にあわない。

II 邪馬壹国への道 榎一雄氏への再批判

はじめに-崩壊する歴史の虚構-記紀は古代天皇家の自撰の歴史書だから客観的な歴史事実かを改めて検証することが歴史学である。朝鮮半島には三国史記と三国遺事があり、記紀と大体において合わない。双方を同時にみたら頭脳の混乱は避けがたい。古田の場合は魏志倭人伝が基本である。第1次邪馬台国ブームの中で古田も開眼した。榎氏の読売新聞5月29日から6月16日まで15回の「邪馬台国はなかった」か、への再反論は榎氏の論点を1つ1つ拾いあげ、私・古田の批判を立証することになった。

① 古田の壹と臺の調査には脱漏がある。誤植問題は榎氏は承知のはずだ。②絶対と正確無比は榎氏の用語。陳寿を信じ通すは心情的表現。榎氏は中国人のプリントは当てにならないという。具体的な実証を一般論ですりかえてはならない。紹熙本は現存最良の版本とみなす。③版本に絶対はないから版本をいじる権利があるという論法は許されない。書写原本に対して自筆原本の意義を固定して原本などありもしないと嘲笑しようとした。④旧蔵 現代の図書館用語で張元済の旧蔵を誤りとしている。

<校史随筆について> 藤田隆一氏の読み下し文で読書会では十分理解した。紹熙本が各本と比較して優れている。張元済が紹熙本と紹興本を比較しなかったと云う主張は成立しない。呉志残卷(西域発見の注の入っていないもの)で紹熙本を校本している。紹熙本独自の表現は対海国。張元済は34例をあげて、紹熙本をもとに諸本の校異をしている。榎氏の断章取義の曲解(象の鼻を撫でて全体と誤解すること)。毛玠伝の太祖(曹操)の慧眼を踏まえている。

次回日程 2016-12-2(金) 16時~19時 1503号室

-12-26(月) 15時~18時 1503号室